

奈良 勲(編著者代表)

解剖学・生理学・運動学に基づく動作分析

評者 久保 晃

国際医療福祉大学

観察に基づく動作分析能力の修得は、理学療法士に必須であり、学生が臨床実習で最も苦勞する課題である。また、駆け出しの頃は対象者の自然な動きの観察ですら難題であり、動作の速さや方向などの複合的な反応の分析となるとお手上げ状態になってしまう。一方、臨床現場の教育者や熟練者ともなるとハンドリングをさらに加えて空間的、時間的反応の変化に対して、五感を駆使して動作分析を展開する。

筆者自身は、己の身体の動きや健常者の分析すらままならないことを幾度となく体験してきた。この体験を経ずして動作分析能力を修得できる学生や理学療法士はおそらく少数派であろう。その訳は、動作分析の統合過程に直感や非科学的要素(信頼性や妥当性の危うさ)が存在するのは、ヒトの動作や歩行、日常生活活動には不確定な要因(その場の明るさや温度などの環境条件、感情など)が含まれていて、それらの要素を含めて仮説検証を実践するためと考えられる。設問の解答に選択肢が提示されていて、必ず正解にたどりつけるわけではないことが動作分析の特徴である。

いわゆる観察眼の鋭い臨床能力の優れた理学療法士の多くは、直感的な印象と、客観的な指標に基づく仮説が混在した情報を統合しながら動作を分析している。本書は、その統合の筋道の整理に挑んでいる。

本書は、全3章と21のコラムで編成されている。第1章は、基礎知識として、解剖学、生理学、運動学、廃用症候学から成る。第2章は、解剖学・生理学・運動学に基づき基本動作から走行、投球までの動作を分析・統合している。第3章では解剖学・生理学・運動学に視点をおいたうえで広範な解釈を取り入れられるように、日常生活活動の分析と統合を試みている。いずれの章も理学療法領域に限定せ

ず、全人的な観点で編成されている。

理学療法士以外に、基礎分野の研究者、作業療法士、言語聴覚士が執筆している項目もあり、臨床現場で勤務する関連専門職が実際に対象者を通じて情報共有し、連携をとることが意図された内容となっている。よって本書は、広く関連専門職に推奨できる書籍である。

本書は広範な視座から執筆されており、評価や総合臨床実習で実践的に動作分析を行う初学者はもちろんのこと、臨床現場の実習教育者や養成校の教員、あるいは「動作分析には自信がある」と豪語する関連専門職にも役立つ。基礎から臨床応用に至る過程を関連付けて学びたい人々には最適の書籍である。



B5判・416頁
定価：本体7,400円＋税
医歯薬出版刊、2018年